

書評

有田 眞 監修
犀川哲典・小野克重 編

QT 間隔の診かた・考えかた

長崎大学名誉教授
橋 場 邦 武

臨床的な「QT 間隔」の概念には、QT 時間の計測値だけではなく、T 波形の種々の情報も含まれている。「QT 間隔」についてはこの十数年間の基礎的・臨床的進歩は非常に大きく、このことは今回刊行された本書と1999年の有田・伊東・犀川編集の当時最新であった『QT 間隔の基礎と臨床 QT interval and dispersion』を比較しても明瞭である。イオン・チャンネル病としての重症心室性不整脈、抗不整脈薬の催不整脈作用の機序などとの関連において急速に研究が発展した「QT 間隔」であるが、最近でもイオン・チャンネル変異による新しい不整脈の発見なども含め、基礎的・臨床的にその内容が非常に深く広くなったばかりではなく、虚血や心不全の病態の理解や予後関連因子としての検討も行われている。「QT 間隔」は不整脈や心電図に特に関心のある医師のみではなく、すべての循環器医にとって必須というべき領域となっており、この時期に本書が刊行されたことはまさに時に時宜を得たものといえる。

本書は、第I部：QT 間隔の基礎的背景と計測(第1-9章)、第II部：先天性QT 延長症候群とその類縁疾患(第10-13章)、第III

部：QT 延長に影響する薬剤および病態(第14-18章)、に分けられ、3部/18章から構成されている。

第I部では基礎的な問題として、心室筋再分極過程を形成するイオン電流の種類と性質、各チャネルの構造と機能、それらの心室筋各層における特徴的分布、多くの基本的因子を含めた活動電位シミュレーション、などについての最新の知見がまとめられている。さらに基礎的な問題と、臨床心電図QT 間隔との接点として、MAP(monophasic action potential)やARI(activation-recovery interval)などの意義、性ホルモンや交感神経の影響、計測法に触れている。臨床医が敬遠しがちな基礎生理分野の最近の知識が、理解しやすく整理され、興味深く解説されている。

第II部では従来のLQT1からLQT3に加えて、LQT10までが明らかになっている10のQT 延長症候群の各型について詳述されている。新しい変異による症候群の電気生理的機序、心臓以外の表現形としての臨床症状についての概説が述べられ、LQTSの最新の発展の知識を整理することができる。さらに後天性QT 延長症

候群における遺伝子異常の探究、Brugada 症候群の問題点、QT 短縮症候群、オーバーラップ症候群、などについても最新の知識が述べられている。

第III部では再分極相の延長が抗不整脈効果の主役であるIII群抗不整脈薬のそれぞれの特徴の比較がなされ、抗不整脈薬以外の各種薬物のQT 延長作用、虚血におけるQT 間隔変動の機序と意義、心不全におけるリモデリングとQT、QT 間隔と性差、などの臨床における重要事項についての現状と見解が述べられている。

以上のように、本書はQT 間隔についての最新の知見の概観を与えてくれるが、加えて各章ごとの末尾に『読者と一緒に考えるQ & A』という約1頁の解説が付けられている。これは質問したくても質問しにくい項目などが取り上げられており、読者に親切なばかりでなく、フォーマルな記載を離れてのコメントや追加によって、筆者が問題点を提供しているものもあり、興味深いコラムとなっている。

Einthoven から100年を経て、QT を中心とするこのような心電学の理論的・臨床的發展は壮観とも感じる。行き届いた編集による、第一線の専門家による著作は読みやすく、安心感がある。興味深く、また、臨床的に有用な本書を広く循環器医に推薦したいと思う次第である。

〔B5 頁276 2007年 定価
6,720円(本体6,400円+税5%) 医学書院刊〕